詩人作家研究者

病いは金剛石よりも固い
学友、詩人村上昭夫のこと

岡澤　敏男（旧15回生）

村上　昭夫
（1927～1968）

盛岡の郊外、雫石川にほど近い本宮字蛇屋敷に盛岡市先人記念館がある。明治期以降に活躍した盛岡にゆかりをもつ一五二人の先人を紹介する文化の殿堂だ。この記念館の二階に総合展示室があり、政治・経済・学術・芸術の各分野ごとに三角錐状の巨大なる象牙の塔が建っていて、この壁面に先人一五二人のレリーフが嵌め込んでいる。その芸術の塔に石川啄木や宮沢賢治とともにわが学友・村上昭夫の懐かしいレリーフがある。

中学生の頃の昭夫は文学とは縁遠く、まじめな憂国少年だった。その少年が後年H氏賞を受賞する詩人に変身したのは、多分に満州体験とかかわりがある。

昭和二十年三月、昭夫は中学卒業後級友三人（山内健一郎、古館敏夫、浜田彪）とともに渡満し、旧満州国の官吏になった。赴任したのはハルピン市のある賓江省の役所だった。しかしソ連軍の満州侵攻によりあっけなく失職、敗戦国難民として無頼の生活―「用心棒・御用聞き・薬品ブローカー・露店商・行商・砂糖製造・菓子作り・家財処分の手数料稼ぎなど人殺し以外はなんでもやって露命をつないだ」（山内君の話・石桜振興会主催第二回『昭夫を語る会』）という、じつにすざまじい一八歳の昭夫だった。

よその国で迎えた敗戦、支配者と被支配者との立場が逆転し、強権・搾取で塗り固めた五族協和のしっぺ返しに逃げ惑う同胞の、たくさんの死と、悲惨と、醜悪さとを嫌というほど覗いてしまった昭夫の内部で、ひそかに

著者略歴
おかざわとしお／盛岡市生まれ。盛岡農林専門学校獣医畜産科卒。釜石高校教諭、会社員を経て49年小岩井農牧入社、59年退職後、小岩井農場資料館長。小泉とし夫の筆名で短歌も作り、文芸誌「北宴」編集同人、不来方啄木の会会長。滝沢村在住。

詩人が芽生えつつあった。そして二一年の秋、昭夫は「性格がすっかり変わっていたという感じ」（弟さんの話・第三回「昭夫を語る会」）で満州から帰ってきた。

帰国して盛岡郵便局に勤めたが、二年後に満州でのムリがたたり、結核を病み岩手サナトリウムで左胸郭整形手術を受けた。入院中に宮沢賢治の童話が詩人の種子を触発し、心象スケッチ風の詩作がノートいっぱいになった。それが「荒野とポプラ」だった。戦争を呪い、満州の生々しい記憶が書かれていた。つぎの「反省して」はそうした詩のひとつ。

「臭いな　死臭／一里四方に人間の死体がごろごろころがり／臭い　臭い／みんな地獄に落ちた顔」（以下略）

これらのノートの詩の多くは、たまたま入院してきた詩人高橋昭八郎氏が「この人はいったい詩人として才能があるだろうか」と首をかしげるほど幼かった。その後、昭八郎氏により昭夫は現代詩の世界に目を開かれ、多彩な表現や技法なども吸収していった。

昭夫の人生の転機になったのは、五年間の病気休職によって盛岡郵便局を免職されたことだった。もう詩を唯一の生きがいとするしかなかった。しかし、幸運にも昭夫の詩才をひきだしてくれる人に出会った。その人は詩学研究会や「世代」（「現代詩手帖」の前身）の選評者で新人発掘に定評ある詩壇の大御所の村野四郎だった。村野四郎は、昭夫が郵便局を免職になる少し前から岩手日報「日報詩壇」の選者となっていた。昭和二九年の事だった。昭夫は「日報詩壇」に投稿し、村野四郎の選評を指標として詩作に励んだ。投稿は病没する二年前の四一年まで続け、村野四郎から五六回の選評を受けたという。

昭夫は社会復帰を諦め、肺疾の苦痛に耐えながらも岩手詩人クラブの幹事となり機関誌「皿」の編集を担当し、大坪孝二・宮静枝等の詩人と交流しながら華々しく活動した時期もあった。しかし三四年に右肺に空洞ができ仙台厚生病院に入院、三六年に肺葉切除手術したが経過が悪く主治医より「あと五年の寿命」と宣告されてしまった。昭夫は詩誌「La」（大坪孝二主催・昭夫は三四年三月入会）に連作「動物哀歌」を順次発表していたが、死の予告で鋭敏になった昭夫の詩はいっそう透徹になり、宇宙的な深さまで達するようになった。昭夫のすごさは、絶望も挫折もせず死を受容し、つらく悲しい「死の眼鏡」を通して動物や植物、人間の姿をした「未知なる死」と対峙したことだと思う。

「私は治らない病気をもっているから／それで／雁の声がきこえるのだ」「治らない人の病いは／あの涯のない宇宙の涯の深さと／おんなじだ」で知られる代表作「雁の声」も、「病んで光より早いものを知った／病んで金剛石よりも固いものを知った」「病いは／金剛石よりも十倍も固い金剛石なのだ」と歌った「病い」という詩も、「死の眼鏡」から感知した「未知なるもの」なのだろう。

四二年九月、昭夫の詩は詩集『動物哀歌』として上梓された。大坪孝二、宮静枝、高橋明八郎による友情出版だった。『動物哀歌』は第八回土井晩翠賞（四二年一〇月）についで第一八回H氏賞（四三年三月）をも受賞した。昭夫は病状が悪化し授賞式に出席できずその年の一〇月一一日永眠した。満四一歳だった。H氏賞は文壇の芥川賞に匹敵する権威あるもので、岩手ばかりか東北でも昭夫が初めての受賞だった。その業績が評価され平成二年設立された盛岡市先人記念館に芸術文化部門の殿堂入りを果たすことになった。

村上昭夫の略歴

一九二七年（昭二）一月五日岩手県東磐井郡大原町（現在は大東町）生まれ。四五年（昭和二〇）岩手中学卒業。満州国賓江省官吏となり渡満、敗戦により失職、雑役にて露命を保つ。四六年（昭和二一）秋帰国、翌年盛岡郵便局事務員に採用されたが五〇年（昭和二五）結核発病、岩手サナトリウムに入院し左胸郭整形手術を行う。院内で詩作を始め詩人高橋昭八郎を知る。経過良く退院し五四年（昭和二九）岩手詩人クラブ結成会員になる。五六年（三〇）長期間病気休職により郵便局を免職。岩手日報学芸欄に「日報詩壇」が設けられこれに投稿し、選者村野四郎に才能が認められ村野を終生の師と仰ぐ。詩人クラブの幹事となり機関誌「皿」の編集に携わる。詩人大坪孝二、宮静枝、大村孝子等と交友し詩作に熱中する。五九年（昭和三四）右肺に空洞ができ詩人クラブから手をひく。詩誌『La』に「動物哀歌」の連作を発表。仙台厚生病院に入院、六一年（昭和三六）右肺葉切除手術したが、寿命あと五年と言われ詩作に情熱をふりしぼる。結核から胃潰瘍、十二指潰瘍、胆嚢炎、悪性貧血を併発し衰弱が進む。宮静枝、大坪孝二、高橋昭八郎の協力を得て六七年（昭和四二）詩集『動物哀歌』を上梓。第八回土井晩翠賞受賞。六八年（昭和四三）三月第一八回H氏賞受賞、一〇月一一日国立盛岡療養所西下病棟にて肺結核と肺性心の合併症にて逝去。享年四二歳。